

研究発表もうしこみフォーム

氏名：薩出日拉图

氏名のローマ字表記：SACHURILATU（サチャラレト）

所属：内モンゴ師範大学民族学人類学学院

専門分野：明清史、蒙古史

発表のタイトル：「部族をもって牧地を与える」から旗界面定まで—乾隆初期の伊克昭盟における旗界面定の歴史記録—

発表要旨（600字～800字程度）：乾隆元年（1736）、清朝は伊克昭盟にオルドス右翼前末旗を増設した。同旗の牧地はウーシン旗と郡王旗から割譲されたため、三旗の間に牧地をめぐって論争が生じた。清政府は寧夏と神武の理事司員に対し、旗の境界線を画定して紛争を解決するために会盟を招集するよう命じたが、決着がつかなかった。そこで乾隆帝は乾清門侍衛郭爾多を伊克昭盟に派遣して審問させ、最終的に紛争を解決した。その際に作成された檔案には、伊克昭盟の旗界面定に至る歴史的過程が反映されている。すなわち、1649年から1650年にかけて、清朝が初めてオルドスに六つのザサグ旗を設けたとき、「部族（otoy）をもって牧地を与える」という方法をとった。つまり、牧地は部族を単位に割り当てられ、領主は元の土地に居住し牧畜を営むことが認められた。このときは旗の境界を画定する作業は行われなかった。その後、康熙二十九年（1690）に旗の境界が最初に画定され、境界図と関連文書が『大清一統志』編纂のために一統志館に提出された。しかし、実際には各旗の牧民は常に混住する状態であった。1736年から1741年にかけて、上述のように牧地紛争処理の過程で再度旗界が画定されたことによって、伊克昭盟七旗の境界が明確となり、『大清一統志』に記載された。この歴史事実は、清朝が『大清一統志』の編纂と旗界面定を通じてモンゴル社会に政治的に浸透し、分割統治戦略を実現したことを示している。また、従来の研究で述べられてきたザサグ旗成立の三条件の一つである「給地」は、実態から見ると明らかにザサグ旗設立の前提条件ではなかった。旗界の画定は、清朝によるモンゴル統治の進展の中で徐々に完了したものと言える。